

# 特定課題研究「選択体系機能言語学による 均衡バイリンガルのコードスイッチングの分析」 研究経過報告書

難 波 和 彦

## 要 旨

日英均衡バイリンガルのコードスイッチングを言語構造と語用論的側面の両方から包括的に説明するために、選択体系機能言語学 (Systemic Functional Linguistics) の3つのメタ機能 (経験的意味機能, 対人的機能, テキスト形成機能) の面から分析する枠組みを構築することが研究の目的である。文中で大きく2言語が切り替わる alternation パターンの CS について, Process と Mood では英語と日本語での同じ役割に繰り返しが見られたが, Theme については, 繰り返しは見られなかった。

キーワード: コードスイッチング, バイリンガリズム, 選択体系機能言語学, 交替, 3つのメタ機能

## 1 はじめに

本報告は特定課題研究 (準備研究支援) として令和4年度に助成をいただいた「選択体系機能言語学による均衡バイリンガルのコードスイッチングの分析」の経過を報告するものである。科研費の基盤Cを取得することを目標として, バイリンガリズムの研究会での基調講演という発表の機会も得たので, 研究に使われているコードスイッチング・選択体系機能言語学の理論の明確な説明ができるように, 研究に取り組んだ。

## 2. 研究の学術的背景

### (1) コードスイッチングの言語構造分析

バイリンガルやマルチリンガル同士が, 複数の言語を切り替えながら会話を続ける現象をコードスイッチング (Code-switching, これ以降 CS) と呼ぶ。CS に関するこれまでの研究は, 例えば「話し相手や状況が変わることによって切り替える」のように CS を説明する社会言語学的・語用論的アプローチと, 「名詞など内容語の部分で切り替えが起こりやすい」のように文法構造から CS を分析するアプローチが取られてきた。

なぜ起こるのか」について, 従来の社会言語学的アプローチでは「会話相手, 会話場面・状況」から分析してきた (Blom & Gumperz 1972)。また語用論的アプローチでは, Gumperz (1982) が会話

の中での「引用」「繰り返し」などの機能からコードスイッチングの類型を分類し、Auer (1998) は会話分析の手法を使用し談話の流れの中での CS の働きに注目をし、Myers-Scotton (1993) は会話の流れをコントロールする方略としてのコードスイッチングの役割に注目してきた。

一方、「どのように起こるのか」を問う研究は、二つの言語の文法がぶつかった時に何が起きているかに関心を向けてきた。Muysken (2000) はコードスイッチングに「挿入」「交替」「融合(筆者による意識)」の3型を設定し、どの型が起きやすいかは、二つの言語間の文法的な構造の違い(言語間距離)によって変わるとした。そして、分析にあたっては、型ごとに違ったアプローチを取ることとを提案している。

挿入型:コードスイッチングが行われている2言語のうち、文法的な枠組みを作っている言語を「母体言語」、埋め込まれる言語を「挿入言語」とする(Myers-Scotton 2002)。借用語と同様の構造をしており、言語間の距離に関わらず起こる。

交替型:文と文の間、または文の途中で母体言語そのものがある点で別の言語に切り替わることをいう。Clyne (2003) は、会話の状況(話し相手など)、文の文法構造そのものなどの要因が引き金(trigger)となって起きているとする。交替型は2言語間の距離が大きいときに見られる。

融合型:融合型は文法的差異が近い言語同士によくみられる。上記二つの型では、ひとつの言語が母体言語を形作るが、融合型では、二つの言語の融合によって母体言語が作られる。(例えば、英語を使って日本語の語順で、母体言語が作られる場合など)

しかし、言語間距離の遠い日本語と英語の間のコードスイッチング、特に上記の交替型について、形式に重点をおいた文法理論では、十分に説明ができない。なぜなら引き金になる要因が談話の流れや話し相手が変わるなどの語用論的なものもあるからである。本研究は、コードスイッチングの発生要因について、従来、社会言語学・語用論的研究が問うてきた「なぜ」と、文法・語彙的研究が問うてきた「どのように」を、より包括的な「何が要因となっているのか」という問いに束ねて分析・説明しようとするものである。

## (2) 選択体系機能言語学

CSの「なぜ」と、「どのように」を、包括的に分析・説明するための、文法理論と社会言語学的・語用論的視点のいずれを含んだメタ・レベルの理論的枠組みとして、Halliday (1994) の「選択体系機能言語学(SFL/Systemic Functional Linguistics)」が応用しうると考える。SFLは「意味分析と語用論的分析を同時に行うツール」であり、社会言語学的・語用論的視点と文法構造的視点のいずれをも包含したメタ・レベルの理論的枠組みである。SFLでは、文の意味や機能に重点をおいて、以下の3つのメタ機能から分析をする。

第一層:経験構成的機能(誰がどこで何をしているのかなど、意味そのものを表す)

第二層:対人的機能(会話相手と情報や行動など、何をやりとりしているかを表す)

第三層:テキスト形成的機能(メッセージの伝え方、談話標識、主題などを表す)

### 3. データ分析

帰国生徒と外国籍生徒がともに学ぶ国際学校の均衡バイリンガル生徒の自然な会話を録音したデータに現れたコードスイッチングの例文を使って、実際に SFL で分析してみる。

#### (1) データ

国際学校の高校生が、トピックを決めて自然な会話をしたものゝ録音し書き起こしたものの中から、CS を使っている文を抜き出す。

例文 1 we should do Secret Santa しようよ

例文 2 ま 冬は you should think about it

#### (2) SFL による分析

CS 文を SFL の 3 つのメタ機能の面から分析すると、どうなるのか以下に示してみる。<sup>1</sup>

例文 -1

		we	should	do	secret Santa	しよう	よ
経験構成的機能	英	actor	Material Process		Range		
	日					Material Process	
対人的機能	英	Subject	Finite	Predicator			
	日					Predicator	Negotiator
		Mood block				Mood block	
テキスト形成的機能	英	Topical Theme					
	日						
		Theme		Rheme			

例文 -2

		ま	冬は	you	should	think	about it
経験構成的機能	英			Senser		Mental Process	Phenomenon
	日		Circumstance				
対人的機能	英			Subject	Finite	Predicator	
	日						
				Mood block			
テキスト形成的機能	英						
	日	Textual Theme	Topical Theme				
		Theme		Rheme			

例文 -1 のほうでは、経験構成的機能の中心となる Process（英語では動詞で表される、ここでは物質的な実際に起こっていることを表す Material Process）が英語でも日本語でも繰り返されていて、対人的機能の中心となる Mood block（英語では Subject+Finite の組み合わせで表される、日本語では、

Predicator (+Negotiator の組み合わせ) で表される) も繰り返されている。これは英語と日本語の文法が途中で交替して同じことが繰り返されているパターンだと考えられる。

例文 -2 のほうでは、Process, Mood block などは、英語のみであらわれているが、談話の流れを表す Theme の部分に関しては、Textual Theme (談話標識など)、Topical Theme (主題) と Rheme (題述部分) の切れ目のところで、CS が起こっている。経験構成的機能と、対人的機能の面から見ると、英語の文法でできた文と言えるが、談話の流れを表すテキスト形式的機能の面から見ると、主題に当たる部分は、日本語の文法、題述にあたる部分は英語というように繰り返してではなく役割分担がされている、ということが考えられる。

#### 4. 研究の経過

当該研究の主目的は、科研費基盤 C の取得であり、それに向けての準備に時間を費やすこととなった。令和 4 年度 5 月の第 1 言語としてのバイリンガリズム研究会第 24 回研究大会「トランス・ランゲージングとコードスイッチングの新たな視点」での基調講演を行い、コードスイッチングの構造についての先行研究と、選択体系機能言語学の三層の分析方法についての説明を「均衡バイリンガルの日英コードスイッチングの構造を分析する: 選択体系機能言語学を用いて」というタイトルの元に行った。バイリンガリズム研究者にとっては、コードスイッチングは耳慣れたトピックではあるが、構造分析についての話をするには、少ないので、その説明をていねいにしたことに加えて、選択体系機能言語学も耳慣れないアプローチなので、それをわかりやすく説明する、ということが、自分自身のこの理論についての理論を深めることにも役立った。日本語の選択体系機能言語学とバイリンガリズムを関連づけた研究をしている研究者との出会いもあり、有意義なものとなった。

その後、主目的である科研費基盤 C の取得に向けて、研究機構のリサーチアドバイザーの方にも相談をしながら、申請書類を書き上げ、結果として 2023 年～2027 年の基盤 C での研究「日英均衡バイリンガルのコードスイッチングの構造分析: 選択体系機能文法を用いて」(課題番号 23K00535) の採択を得ることができた。

#### 5. 今後の研究の展開

令和 5 年度から、科研費基盤 C での研究として、これまでの研究をまとめ、選択体系機能言語学を使ったコードスイッチングの分析方法を確立、発表・出版をすることで、研究者の少ないこの分野の他の研究者に道筋を示していきたい。

#### 注

- 1 各用語は、Halliday (1994) を使用、Negotiator (= 交渉詞) などの日本語分析用語は Teruya (2007) による

## 参考文献

- Auer, P. (1998). *Code-switching in conversation : language, interaction and identity*. London ; New York: Routledge.
- Blom, J.P., & Gumperz, J. J. (1972). Social meaning in linguistic structure: code-switching in Norway. In J. J. Gumperz & D. Hymes (Eds.), *Directions in Sociolinguistics* (pp. 407-434). NY: Holt, Rinehart and Winston.
- Chan, B. H. (2009). Code-switching between typologically distinct languages. In *The cambridge handbook of linguistic code-switching*, ed. B. E. Bullock and A. J. Toribio. Cambridge: Cambridge University Press.
- Clyne, M. G. (2003). *Dynamics of language contact*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Gumperz, J. J. (1982). *Discourse strategies*. Cambridge [Cambridgeshire] ; New York: Cambridge University Press
- Halliday, M. A. K. (1994). *An introduction to functional grammar. 2nd ed.* London: E.Arnold.
- Halliday, M. A. K. (1994). *An introduction to functional grammar. 2nd ed.* London: E.Arnold.
- Muysken, P. (2000). *Bilingual Speech: a typology of code-mixing*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Myers-Scotton, C. (1997). *Duelling Languages: Grammatical Structure in Codeswitching*. Oxford: Oxford University Press.
- Myers-Scotton, C. (2002). *Contact Linguistics*. Oxford: Oxford University Press.
- Teruya, K. (2007). *A Systemic Functional Grammar of Japanese*. London : Continuum.

# A study on balanced bilinguals' codeswitching from the perspective of Systemic Functional Linguistics

Kazuhiko NAMBA

## Abstract

In order to develop a framework for structural and pragmatic analyses of Japanese-English balanced bilinguals' code-switching, the perspectives of experiential, interpersonal and textual meta-functions of Systemic Functional Linguistics have been employed. Regarding the alternational CS in which two languages are switched in the middle of the clause, it was shown that repetition takes place for Process and Mood, but not for Theme.

**Keywords :** code-switching, bilingualism, Systemic Functional Linguistics, alternation, three meta-functions